

こちら特報部

民間レベルでは「避難時にクマ」に備える動きがある。コンテナ販売会社「ジャカコン東日本」(東京都中央区)は東京理科大や複数のコンテナデベロッパーとともに、クマ襲撃からの

岩手県や青森県は現状、対策を特段検討しているわけではないという。かたや大槌町の小笠原課長補佐は「効果的な策がなく、なかなか難しいところがある」と頭を悩ます。

「原則徒歩」の避難を呼びかける中、クマへの警戒から車での避難を選ぶ人がいることについては「危険性がぬぐえないため、車を使う人がいることは理解はできる。その状況を無視せず、渋滞対策などできることを検討したい」と語る。

クマによる被害を受け、政府は関係閣僚会議を開催し、11月にクマ被害対策パッケージをまとめた。狩猟免許を持つ公務員「ガバメントハンター」の育成や出沒防止策、個体数の調査・削減などに迅速かつ着実に取り組むとしている。

取りまとめ役となった環境省の担当者は「学校の登下校時といった日常生活レベルの安全確保については検討している」と述べる一方、「災害など、緊急時の避難までは議論できていない」と明かす。

「冬眠から起きた」「揺れのパニックで暴れる」

厄介なSNSデマ



①ジャカコン東日本などが共同開発したシェルターのイメージ画像(同社提供)
②岩手県内の避難所にいた人たちは9日

避難、災害時の短期避難の双方の目的を果たすシェルター「LIFE SHIELD CONTAINER(愛称・クマコン)」を共同開発すると発表した。同社によると、今月から販売を受け付けている。鉄製で20トンの荷重に耐えられる構造。クマが体当たりしたり、爪で引っかいたりする衝撃では壊れない。クマが侵入しにくいよう、引き戸式の入り口を採用し、コンテナ内から外部をのぞける「スリット窓」も四方に設置した。72時間は過ごすことができる飲料水や保存食、簡易トイレ、救急箱などが装備されている。

「覚醒は一時的、すぐに再び眠る」

守る場所として活用してほしい」と話す。安全な避難には、クマの出沒情報などを適宜適切に得たいところだが、交流サイト(SNS)上では真偽不明の情報飛び交う。青森で最大震度6強を記録した地震の発生後は「冬眠熊も起きたみたい」「熊が揺れのパニックで暴れ出さないか警戒する必要があるかも」とつづられた。

自治体は対応苦悩も…「細やかな発信を」

「想像だけで根拠のない情報を発信すれば、多くの人々の恐怖を過度におおることになる」との認識を持つべきだ」と警鐘を鳴らす。さらに「受け手側も信じたり、拡散したりしないために情報の発信源を意識する必要がある」と続け、行政機関には「こう求める。発信元として信頼されるため、クマに関する情報を丁寧に収集すべきだ。単なる目撃情報にとどめず、人に被害を及ぼすリスクも分かるよう細やかな情報提供を意識してほしい」



2025.12.17

こちら特

今年も残すところ、2週間。地震に津波、大規模火災と災害が相次いだ年だった。そんな中で忘れてならないのがクマ。人里に出没するだけでなく、新たな課題も浮かびつつある。「災害の避難時にクマと遭遇しないか」という点だ。「地震と津波」をはじめとした複合災害はかねて懸念されてきたが、「地震とクマ」「津波とクマ」などにはどう備えるべきか。(松島京太、山田雄之)

災害避難時にクマ

どう備える?

岩手県内の施設の敷地内にとどまるクマ=10月20日



「周りの人たちはクマが怖いから避難するかどうかを迷っている」。岩手県大槌町で暮らす震災伝承団体の代表、神谷未生さん(50)は「こちら特報部」の電話取材にそう語った。

8日深夜、青森県で最大震度6強を観測した地震。神谷さんは自家用車を使い、町が指定する避難所がある高台へ向かった。自宅は河川が近く、浸水想定区域にある。避難所までは車で5分ほどの距離だ。

「もし大津波が来て、そのままでのみ込まれていたらと思うとゾッとする」。「避難時にクマ」が懸念される事態は、8日の地震のちよつと1カ月前にも生じていた。

避難所付近に出没例

大槌町と隣の釜石市、岩手県は11月8日、避難所周辺でクマが出没する可能性があることから、毎年実施してきた高台への避難訓練を中止している。町防災対策課の小笠原佑樹課長補佐は「避難訓練であえて危険な場所に行くよりは中止をした方がよいという判断となった」と説明する。

8日の地震 遭遇恐れ、車使い、渋滞の悪循環

住民がクマを不安に思うことは不思議ではない」と語る。本年度の釜石、大槌の両市町では11月末までに計363件のクマ出没が報告されており、人身被害も1件ずつあったという。住民が集まる避難所の近くに実際、クマが出没したケースもあった。